

する。なお、ルビ文字が連数字中の文字 (cl-24)、単位記号中の文字 (cl-25)、欧文用間隔 (cl-26)、欧文用文字 (cl-27) のように固有の字幅を持つ文字の場合には、それぞれの文字の固有の字幅に応じて配置する (図 7 参照)。

- (2) ルビ文字列と親文字の字詰め方向の中心をそろえて配置する (図 8 参照)。
- (3) モノルビの場合、親文字とそれに付くルビ文字の文字列は、一体として扱い、2 行に分割してはならない。
- (4) 親文字よりルビ文字列の全長が長い場合、親文字からはみ出したルビ文字を親文字の前又は後ろに配置する文字に掛けてはならない (図 8 参照)。

ただし、次に掲げる句読点類 (cl-06) など、その後ろ又は前に空きがある約物などにはルビを掛ける (図 9 参照)。(ここで、句点類 (cl-06) などの処理に差をつけたのは、句点類 (cl-06) などは、文章の区切りとして重要な役割を果たしており、これらの後ろや前後の空きをできるだけ一定していることが望ましく、特にこれらの空気が大きくなると、区切りの意味を変える恐れがあること、また、冒頭の注の“親文字からのルビのはみ出し”で述べたような問題もでないことによる。)

- 親文字の前に配置する終わり括弧類 (cl-02)、句点類 (cl-06)、読点類 (cl-07)、和字間隔 (cl-14) 又は中点類 (cl-05) の後ろのアキ (このアキは、中点類 (cl-05) 以外、通常は親文字の二分 (中点類 (cl-05) は四分)、ただし、行の調整処理で二分アキや四分アキが詰められている場合は、調整で詰められた空き量までとする、例えば、四分アキとなっていれば、四分まで)
- 親文字の後ろに配置する始め括弧類 (cl-01)、和字間隔 (cl-14) 又は中点類 (cl-05) の前のアキ (始め括弧類 (cl-01) は通常は親文字の二分、中点類 (cl-05) は四分)、ただし、行の調整処理で二分アキや四分アキが詰められている場合は、調整で詰められた空き量までとする、例えば、四分アキとなっていれば、四分まで)

- (5) 親文字列よりルビ文字列の全長が長い場合、行頭ではルビ文字列の先頭を行頭にそろえ (図 10 参照)、行末ではルビ文字列の末尾を行末にそろえる (図 11 参照)。

### グループルビの配置処理

ここでは連数字中の文字 (cl-24)、単位記号中の文字 (cl-25)、欧文用間隔 (cl-26)、欧文用文字 (cl-27) のように固有の字幅を持った文字 (以下、この項では“欧文用文字等”という) と、平仮名 (cl-15)、片仮名 (cl-16)、漢字等 (cl-19) など (以下のこの項では“仮名等”という) の 2 つに分けて、その組合せで配置方法を説明する。欧文用文字等は、複数の文字をまとめて読むので、字間を空ける処理は、できるだけ避けたいという事情があるからである。いずれの場合も最初に、それぞれをバタ組にした場合のルビ文字列の全長と、親文字列の全長を比較し、配置方法を定める。この場合のルビ文字列の全長と親

silver  
銀

図 7 欧字のモノルビの例

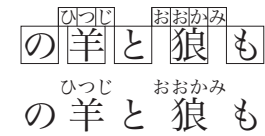


図 8 はみ出しのあるモノルビの例 1

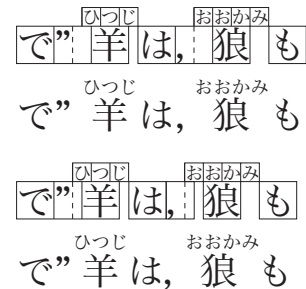


図 9 はみ出しのあるモノルビの例 2 (下側が約物の後ろが四分詰められている例)

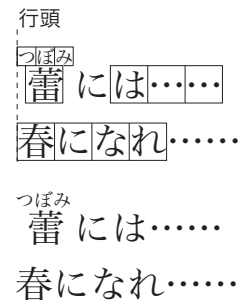


図 10 行頭のモノルビの例

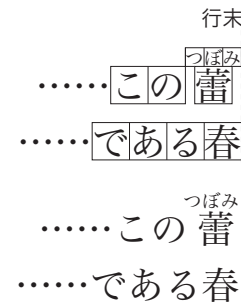


図 11 行末のモノルビの例

**グループルビの字間を空ける処理** グループルビの場合、ルビ文字の全体と親文字の全体とが対応していることが望ましい。しかし、字数によって文字列の長さが異なる。そこで仮名等の場合、ルビ文字列や親文字列の字間や、その前後を空けて対応をとる。ここで採用している前後のアキ 1 に対し、字間を 2 の比率で空ける方法は、活字組版の時代でも、見た目のバランスの良い方法といわれていた。

これに対し、欧文用文字等では、全体の対応よりは、欧文用文字等のまとまりを重視し、字間を空ける処理を採用しないこととした。